

2012年9月17日
0:12

くるり

赫
焉
焰

30××年。いつのまにか国々は争うこと止め、世界中で脅かされることのない平和が実現していた。

科学技術も凄まじい発展を遂げ、世界一周旅行どころか宇宙一周旅行までもが可能になった。

ロボットを駆使するようになった人々は、自らの手を煩わせることなくあらゆる作業をこなせるようになり、何もしなくてもすべてが順風満帆に進む仕組みを作り上げた。

しかし、この時代にはひとつ――たつたひとつ大きな問題があった。自分たちが動かなくとも生きていけるようになった結果、人類は行動すること

を止めてしまった。行動することを止めた人類は意欲を持つこともなくなり、いつしか毎日怠けて過ごすばかりになってしまった。

人類はロボットにすべて任せ、自分たちは一日横になっているだけの、モノのような存在に成り下がった。

30××年。
この世は末法である。

□ □ □

「昼飯用意して」

少年がそう言うと、すぐさま人形のロボットがキツチンに走り、包丁片手に料理を作り始めた。千年前なら青春を謳歌していたであろう年齢の彼は、ただただ部屋の中央に横たわるのみで、さながら道端の石ころのように、無意味な生を晒していた。

ロボットは言語能力を持たない。話し相手になることもない。それは単なる道具に過ぎず、少年もそれ以上を望みはしなかった。

刺激のない日々に慣れ切った彼は、誰に対しても何も求めない。外部から何かの接触があれば違うのかもしれないが、それをすべき他者も同じような状態である。

もはや彼を活動的にするのなら、神のような存在に頼るしかないのかもしれない。

ロボットがスペグッティを運んできたとき、インター ホンが鳴り響いた。

もちろん少年が出ることはない。ロボットがどたどたとドアに向かい、無言のやり取り——勿論相手もロボットである——の後に戻ってくる。どうやら宅配便だつたようで、ロボットは荷物をダンボールから取り出すると、恭しくそれを少年の前に置いた。

億劫に感じながらも少年は起き上がり、それを手に取った。

「週刊だいぶつ！ 蘆遮那仏像（1／1000スケールモデル）をつくる……？」

少年はその荷物——分厚い本に書かれたタイトルを音読した。ページをぱらぱらとめくる。どうやらこの冊子が創刊号らしく、その大部分がこの冊子の目的、完成時の写真などの詳細な情報だつた。

ふと少年は、ダンボールの中にまだ何かがあることに気づく。取り出そうと手に持つてみると、案外重い。

「これは……身体、か」

奈良大仏のものらしき上半身のパーツだった。首と腰に当たる部分に、不自然な穴がある。恐らくここに別のパーツを組み合わせるのだろう。

「んー？」

少年は首をかしげる。

「こんなのは注文したかなあ……？」

記憶を手繰つてみても、心当たりは一切ない。ロボットが間違えて注文したのかもしないと思つた

が、少年はすぐにその可能性を否定した。彼らは与えられた仕事以外のことは一切行えないように作ら

れている。フィクション世界のように、感情が芽生えて反乱を起こす、ということが起こらないように。「まあ、いいか」

考えるのが面倒になつた少年は、再び床に寝転がる。さて今晚の夕飯はなんだろう、という取留めのないことを考えながら、少年は眠りに落ちた。

それから二週間後。

「うーん？」

二週間前、そして一週間前と同じように、あぐらをかいした少年は首をかしげている。眼前には、床に転がつた三つの部品。

頭部。

上半身。

下半身。

それらを眺めながら、少年は疑問の声を上げている。

「注文してないぞ……？」

毎週決まつた曜日の決まつた時間に、毎回同じ荷物がやってくる。

「別に内容に興味はないんだけどなあ……でも」折角だし、と考えた少年は、パーツを手に取り、組み合わせる。

1 / 1000 スケールの盧遮那仏（スキンヘッド）

が出来上がった。

盧遮那仏（スキンヘッド）が出来上がったのだ。

「……髪の毛は？」

少年は盧遮那仏像を持ち上げ、詳細に調べてみる。

頭部を触ると、ざらざらとした感触。まさか、と思

い、頭部をじっくり眺めると、

「ああ」

そういうことか、と少年は肩を落とす。盧遮那仏

像の頭部には、夥しい数の穴があつたのだ。数えることを諦めたくなるぐらいの、大量の穴が。

つまり、この穴の数だけ、髪の毛のパツツが必要

ということだ。

「めんどくせー」

そう叫んで、少年は背中から床にごろん、と寝転が

つた。ざつと見ただけでも三桁はある。穴の一つ一

つに毎週毎週さくりさくりと髪の毛を挿し込むのは、辛抱を知らない少年にはあまりにも退屈な作業だ。

「もういいや」

少年は盧遮那仏像を投げ出し、ロボットにテレビの電源を入れてもらつた。ニュース番組が映る。

『次のニュースです。ここ三週間ほど、各家に謎の冊子が届いていることについて、警察庁は調査を進めています』

表示されたテロップを、少年はまじまじと見つめる。

「んー？」

どうやら、注文していない『週刊だいぶつ！』が家に届いているのは、少年だけではないようだつた。

「んー」

少年の心に、今まで殆ど生じなかつた感情——興味が、湧いてきた。

それから、少年の元に『週刊だいぶつ！』が届く度に、盧遮那仏像の頭に髪の毛を挿す日々が始まつた。

冊子の内容もだんだんと充実していき、退屈な歴史の情報以外にも、大仏にちなんだ料理のレシピが掲載され、仏達の日常を描く四コマ漫画「ぶつぞう！」の連載が始まった。

盧遮那仏の髪の毛が増えるにつれ、少年の日々も少しずつ活気溢れていった。まずテレビの電源を自分で点けるようになり、玄関まで自分で歩くようになった。さらに料理も自分で作り始めた。雑誌に掲載された大仏料理を実際に作ることが彼の趣味となつた。

いつのまにか彼は、毎週届く『週刊だいぶつ！』を生き甲斐として、日々を快活に過ごしていた。盧遮那仏の髪の毛は依然としてフサフサになる気配は無いが、少年はそれを全く気にしなかつた。

このような傾向は少年だけでなく日本全体に見られ、『週刊だいぶつ！』は一大センセーションを巻き起こした。「ぶつぞう！」はアニメ化され、子供から大人まで大人気の作品となり、読者参加コーナーで

は「ぼくのかんがえたさいきようのぶつぞう」を募集中たり、いわゆる「仏像ガール」によるファンション紹介がされたりした。

流行は日本に留まらず、アメリカ、イギリス、そして世界各地へと広がり、「週刊だいぶつ！」は爆発的ブームとなり、誰もが中途半端な髪を持つ大仏を所有する時代となつた。

人類はただ提供されるバーツを待つだけでは満足できなくなり、ついには自ら仏像を作り始めた。木を彫る、石を削る、CGを駆使する、絵を描く……様々な方法で様々な仏像が生み出された。

しかし時代は30××年。もはや古代の産物と言つても差し支えない仏像の姿は、現在の都市にはあまりにも似合わなかつた。

そこで人類は最先端技術を駆使し、仏像に似合う都市を作ろうとした。全世界で各々の気象に合わせた都市づくりがなされ、特に日本では従来のオリハルコン建築から木造建築への移行が進み、ロボット

ではなく人間のムラのある技術が「温かみがある」として重宝された。アスファルトも必要最低限にまで減られ、多くの小道が土の道となつた。

また、仏像と相性のいい動物として鹿が挙げられ、人は積極的に鹿をペットとして飼うようになり、鹿せんべいが生活必需品となつた。

いつしか人類は、時代を逆行し、全てを自らの手で行つていた。かつてロボットがいた仕事上では人間が汗水垂らして働くようになり、彼らはそれに充足感を感じていた。

そして、彼らの傍にはいつも、『週刊だいぶつ!』があつたのだ。

□
□
□

「これが、最後の一本……」

老人は感慨深く息を吐き、その指先に持つた盧遮那仏の髪の毛を、像の頭部に挿しこんだ。

「おお……なんと神々しい……」

ありがたやありがたや、と老人は手を合わせる。

その目からは、大量の涙が零れていた。

彼の横に置かれている本の表紙には、こう書かれている。

『週刊だいぶつ!』は今号で最終号となります。今までありがとうございました!』

31××年。いつのまにか人々は争うこと止め、世界中で脅かされることのない平和が実現していた。

科学技術も凄まじい発展を遂げ、宇宙一周旅行どころか平行世界旅行までもが可能になつた。

自らの願いを持つようになった人々は、それを満たすために自分で働き、そうしなくては充実して生きていけない仕組みを作り上げた。

この時代には何も——ほんのひとつの問題もない。

自分たちが動かなくても生きていける世界はもはや存在せず、人類は行動することを余儀なくされた。行動することを余儀なくされた人類は意欲を持つようになり、いつしか毎日汗水垂らして過ごすようになった。

人類は自らの手ですべてを行い、快活に毎日を過ごす、まさしく生きているモノとなつたのだ。

31××年。

この世は正法である。